

「ぺこば」から学ぶ多様性時代のコミュニケーション —ダイバーシティからインクルージョンへの変遷の中で

成瀬 翔太

なるせ しょうた



株式会社

ブランドアクティベーション統括
顧客価値開発本部 大阪顧客発掘局
谷口（智）チーム

この度はこのような名誉ある賞に選出いただき、誠にありがとうございます。執筆にご協力いただいた皆様、そして私のお笑い感を変えてくださった「ぺこば」のお二人に感謝申し上げます。

このコロナ禍の中で入社し、まさに不透明な時代を実感した1年でした。そんな日々変わりゆく業界・社会をどうとらえていくか考える機会をこの論文執筆を通していただけたと思っております。コロナ世代と言われる私たちだからこそできる業界・社会へのかかわり方を模索し、日々精進していきたいと思っております。

1 はじめに

2019年12月22日、お笑いが大好きな私は漫才コンビの日本一を決める「M-1グランプリ」の決勝戦を見ていた。そこであるコンビの漫才から今までにない衝撃を受けた。そのコンビの名は「ぺこば」である。決勝ファーストラウンドの最後に登場した「ぺこば」は、会場の爆笑をかっさらい、最終決戦に進出。見事3位を獲得した。

今までの多くの漫才、お笑いは“非常識、不可解”な行動をするボケをツッコミが指摘、批判するという形式をとっていた。しかし「ぺこば」はその“非常識で不可解な”ボケをあえて肯定するという新しい形のお笑いを披露した。

私自身、お笑いとはとても好きだが、その在り方には疑問を覚えていた。芸人さんがやるお笑いも、自身の周囲にある笑いもそうだが、「面白いもの＝一般からずれているもの」という風潮があり、そのずれを指摘、批判することが笑いになっている。もちろんあえて不

可解な行動をし、それを分かったうえで批判している場合が多く、そこには攻撃の意図があるわけではないのだが、一種異質性の排除が笑いの概念には含まれていると感じる。

ダイバーシティという言葉が社会を表すキーワードとなっている今日において、そういった排除を生む表現にはより一層の注意が必要である。そこで本稿では「ぺこば」が起こしたお笑い革命について検討することを通して、これからの多様性時代のコミュニケーションについて考察することを試みる。

2 「ぺこば」のお笑いと多様性

「ぺこば」とはSUN MUSICに所属するお笑い芸人であり、ボケ担当のシュウペイ氏とツッコミ担当の松陰寺太勇（しょういんじたいゆう）氏からなる。2019年元日に日本テレビ系列で放送された「ぐるナイおもしろ荘 2019若手にチャンスを頂戴！今年も誰か売れてSP!!」で見事優勝を果たし脚光をあび、

同年12月22日にテレビ朝日系列で放送された「M-1グランプリ2019」（以下、M-1）で3位に入り、時の人となった。

彼らのお笑いの特徴は上述の通り、すべてのボケを否定しないことにあり、その新しい形のお笑いスタイルをダウンタウンの松本人志氏は「ノリつつこまないボケ」と称した。

かつてお笑いとは面白ければ何でもありという風潮が強く、中傷や偏見ギリギリのラインのものが多くみられた。その中で「ぺこば」の「誰も傷つけないお笑い」は個性尊重の時代感にマッチしており、多くの反響を呼んでいる。

オードリーの若林正恭氏は2019年12月28日に放送されたニッポン放送「オードリーのオールナイトニッポン」の中で「ぺこば」の漫才について、「要するにツッコミって、指摘とか否定だったりとか非常識ですよってことだと思っただけで、そういうことって多様性を飲み込む、受け入れるってことに対して相性悪いと思うんだよね。じゃあどうしたのかわかって言ったらその一回ツッコミかけるじゃん、ツッコミかけたあと飲み込むっていう一個のツッコミの中で緊張と緩和を使い分けると、こんな伝わるんだって…」と述べており、多様性時代の新たなお笑いの在り方として「ぺこば」のスタイルを称賛した。

若林氏自身も常識というものが揺らいでいる今日において、個性的な人たちの行動や言動に対してつつこむべきか苦悩していたようで、同番組内で「例えばセブンルール（TV番組名）で、（K-PROの）見島さんはご飯を焼き鳥しか食べないってときに、（中略）多様化されてきたって感じが世の中にあると、焼き鳥しか食べないことをつつこめるのって医者だけだと思っただよね。『いや栄養バランスわるいな！』は成立するけど、その生き方としてなんか常識がバラバラになっているから…」と発言しており、“非常識”を批判す

るつつこみというユーモア表現と、多様性というものの相性の悪さに苦悩している様子がみられた。

大衆社会が崩壊し一種常識が幻想化している今日には、“非常識”を否定する笑いは成立しない。しかし一方でなんでもかんでも受け入れるということがはたして面白いのか、多様性とユーモアの間で表現の在り方は揺れている。次章以降では、「ぺこば」のお笑いを分析し、“非常識”を否定するという従来のお笑いをこえたこれからのコミュニケーションの在り方について考察していきたい。

3 セリフ分析から見る「ぺこば」のお笑い

本章では、「ぺこば」がM-1で披露した2本の漫才を取り上げ、“非常識”を否定するという従来のお笑いの切り口から、どのような切り口へと変革をもたらしたのか考察することを試みる。

「ぺこば」がM-1で披露した2本の漫才を文字起こしし分析することで、27個のユーモア表現が確認された。それらを笑いの切り口が似ているものでグルーピングし、出来上がったカテゴリーをラベリングした。結果、「社会批判」「慣例批判」「異質性容認」「自己内省」という4つのカテゴリーが生成された（表1）。

「社会批判」とはつつこみの矛先をボケ個人にむけるのではなく、社会の課題や風潮に対して向けることによって笑いに変えているカテゴリーとした。この場面で個人を批判する社会の風潮が悪いという視点が今までになく笑いになっていると考えられる。

「慣例批判」とは当たり前として皆が疑問を覚えていない不可解な慣例や常識、固定的な考え方に対して批判をし、笑いに変えるカテゴリーとした。特にお笑いでは表現をわか

表1. M-1における「ぺこば」のユーモア表現の分類

笑いの切り口	件数	ツッコミセリフ例
社会批判	9	2回もぶつかってことは俺が車道側に立っていたのかもしれない。もうだれかのせいにするのはやめよう。 いや休憩はとろう。働き方を変えていこう。
慣例批判	7	ブーンじゃなくてスーンの方がもう街中にあふれている。 いや、お年寄りがお年寄りに席をゆずる時代がもうそこまできています。
異質性容認	6	右だって言ってるのに3回も左に曲がると右になっている。すごいよ運転手さん。 いいかげんなことなんかない。
自己内省	5	お前よりはうるさい。 いやはげてないのは今だけなのかもしれない。先のこと はわからない。

りやすくするためにステレオタイプな表現が多用されるため、そこを逆に指摘する表現は新しさがあり面白いのだと考えられる。

「異質性容認」はボケの驚くような異質性もすべて受け入れることによって笑いに変えるカテゴリとした。皆が思わずつつこみたくなる場面だからこそ受け入れるという表現が予想外でありユーモアとなっていると考えられる。

「自己内省」とは自身に向けられた理不尽な批判に対して、それを受け入れることで笑いに変えるカテゴリとした。これも反論せず受け入れるというところにギャップがあるからこそ笑いになっていると考えられる。

このように整理すると、「ぺこば」のお笑いの本質は「誰も傷つけないお笑い」ではないことがわかる。彼らの漫才の本質は「皆を受け入れともに闘うお笑い」である。

彼らの漫才は、確かに個人を誰も傷つけない表現になっている。どんなにボケが不可解な行動をしても、理不尽な発言をしてもそのすべてを受け入れる。「なんでやねん」と否定することはない。しかし、受け入れて終わりでないのが「ぺこば」の面白い部分である。その異質性や不可解さを受容することで、社会やはびこる固定観念さらにはツッコミ自身

を批判するという表現を多用する。個人が他と異なることに問題はなく、この異質性が受け入れられない社会や常識、さらには自身に問題があるという「批評性」が「ぺこば」のお笑いの真髓だと考えられる。だから「ぺこば」はボケを全肯定することで、社会を批判している。立場の弱い異質な存在やマイノリティの立場に立って、社会や大衆に反抗する。この単なる容認で終わりではない「刺激」と今までのお笑いの形にない「意外性」、そしてどんな生き方も否定しない「やさしさ」が「ぺこば」が新しく作り上げたお笑いのキーポイントだと考えられる。

4 ユーモア分類からみる「ぺこば」のお笑い

本章では、今日までに行われてきたユーモア研究をもとに「ぺこば」のお笑いを構造的に理解することを試みる。

Martin et al. (2003) はユーモアを「肯定的」-「否定的」という軸と「個人内機能」-「対人的機能」という軸の2次元で4つに分類した。

第1は「親和的ユーモア」でジョークを言って周囲を笑わせるなど、肯定的な対人関

係を促進する機能をもつ。第2は「自己高揚的ユーモア」であり、ストレスfulな状況でも出来事の面白い面に目を向け、自己の感情をコントロールする機能をもつ。第3は「攻撃的ユーモア」であり、からかいやつっこみなどによって他者を非難し攻撃する機能がある。第4は「自虐的ユーモア」で過度な自虐をもちいて人の歓心を買ひ、迎合する機能を持つ（高岡，2015）。

「ぺこば」のお笑いをこのユーモア分類に当てはめて考えると以下の図のようにあらわせる（図1）。

従来のお笑いはボケがジョーク、奇怪な言動といった親和的ユーモアをツッコミに発し、それを批判する、つっこむという攻撃的ユーモアで返すという構造をしている。一方で「ぺこば」のお笑いは、ボケが親和的ユーモアを発するまでは一緒だが、ツッコミがボケ個人に攻撃的ユーモアをぶつけることはない。ボケに対して攻撃的ユーモアをぶつけるだろう従来のツッコミや社会風潮に対して、問いかける形で攻撃的ユーモアをぶつけている。だからユーモアの種類自体は従来のお笑いとは「ぺこば」のお笑いに差異はない。攻撃的ユーモアの対象がボケ個人から固定的・旧来的なツッコミの在り方や社会風潮、固定観

念に向けられているということである。

攻撃的ユーモアは排除を含む表現である。しかし、その刺激的な発言がさすがしさや面白さにつながっている部分はある。その攻撃的ユーモアをボケ個人にむけるのではなく、社会や大勢に向けてることで誰も傷つけることなく、むしろ異質性を擁護しつつ刺激的な笑いを可能にしている。これが「ぺこば」のお笑いの構造的革命であると考えられる。

5 「ぺこば」から学ぶ多様性時代のコミュニケーション

今まで2つの観点から「ぺこば」のお笑いについて考察してきた。その結果、「ぺこば」のお笑いは単なるボケの容認や肯定では終わらず、そういったボケの異質性を認められない社会や風潮に批判、問いかけをすることが価値として認められているということが示唆された。

ではなぜこのようなスタイルが社会から認められたのであろうか。私は、多様性に関する議論の進展によるマジョリティ意識の欠如が大きな理由であると考ええる。そして、そこにこれからのコミュニケーションを考えるヒントがあると感じる。

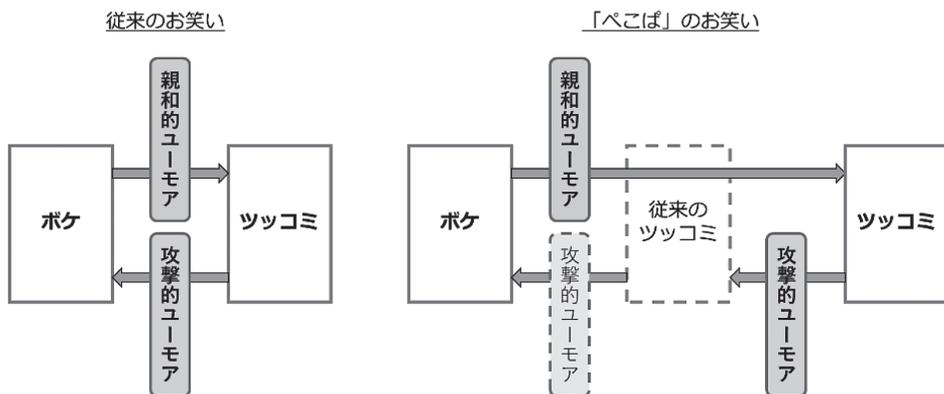


図1. ユーモア分類からみる従来のお笑いとは「ぺこば」のお笑いの違い

社会学者の岸政彦氏は、マジョリティは無色透明の個人として普段は何も考えずに生きており、マイノリティと対峙したとき自分の立場を認識するものであると示している(岸・信田, 2019)。確かに、それは事実であり、自分とは異なるマイノリティの存在が自分たちをマジョリティであると認識させてきた。しかし、昨今の多様性に関する議論は性や国籍、年齢、障害の有無などによってカテゴライズしないことを説いているインクルージョンの概念を重要視しているため、マイノリティの存在を自分の対称の存在として意識し、自分たちがマジョリティだと認識することは少なくなってきたと思われる。かつてのダイバーシティの議論が「異なること」を認識するものであったとすると、昨今のインクルージョンの議論は「同じこと」を認識するものに進展してきたと考えられる。

このことは自分自身を個別にとらえる意識の強まりを意味し、マジョリティの中に自分がいるという感覚の欠如につながっていると考えられる。

そういった流れの中で、ステレオタイプ的なものの考えや、いわゆる“常識”みたいなものは一種嘲笑の対象に変わってきている。だからこそ大衆に迎合したコミュニケーションよりも、そういった大衆と一種敵対する存在であるマイノリティの立場に味方したコミュニケーションのほうが人々は賛同するのではないだろうか。

より多くの人に共感を得られるようなコミュニケーションを考えたとき、一種大衆迎合的なコミュニケーションになるのは自然な流れである。しかしこれからのダイバーシティ社会では、マイノリティを味方するコミュニケーションでマジョリティの共感をえるという一見矛盾した表現が重要になってくると私は考える。

●引用参考文献

日本テレビ公式ホームページ, (https://www.ntv.co.jp/gurunai/oa/2019/01/01_index.html), 2020.7.10

オードリーのオールナイトニッポン公式ホームページ, (<https://www.allnighnippon.com/kw/>), 2020.7.10

今村暁 Imamura Satoru OFFICIAL SITE, 「ぺこばは多様性の時代の新しい漫才。素晴らしい。Pokopa is a new comic artist in the age of diversity. Great !」, (<http://blog.livedoor.jp/kigyouka/archives/52828611.html>), 2020.7.27

上野行良 (1992), 「ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について」, 『社会心理学研究』第7巻第2号, pp.112-120.

Martin, R.A., Puhlik,Doris, P., Larsen, G., Gray, J., & Weir, K. (2003). Individual differences in uses of humor and their relation to psychological well-being: Development of the Humor Styles Questionnaire. Detail Only Available, *Journal of Research in Personality*, 37, 48-75.

高岡しの (2015), 「対人ストレス対処のために産出されたユーモアの分類と出現頻度」, 『笑い学研究』22巻, pp.63-74.

岸政彦, 信田さよ子 (2019), 「マジョリティとはだれか」, 『現代思想の総展望2019—ポストヒューマニティーズ—』(青土社)